



TITLE:

北米旅行記(9)

AUTHOR(S):

山本, 一清

CITATION:

山本, 一清. 北米旅行記(9). 天界 1934, 14(159): 348-357

ISSUE DATE:

1934-06-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/165546>

RIGHT:

北 米 旅 行 記 (9)

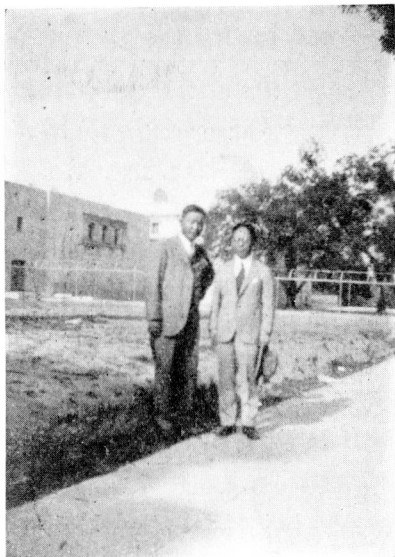
山 本 一 清

(41)

1933年七月20日、朝 9時、約束により長田政二氏がホテルへ來訪されたので、暫く話した後、車で市の内外をドライブした。ホリウドあたりも、十年前に比べて更に美しく變つてゐるのは言ふまでもない。新公園あたり、昨1932年の國際オリムピクの陸上水上競技場等も見、正午過ぎに長田氏の宿に歸着。そこで珍らしい日本式の午餐を頂いた。

午後は又豫定の如く、長田氏と同車してバサデナ市へ行き、Sta. Barbara 街の Mt. Wilson 研究所で、約束の如く J. A. Anderson 博士に會ひ、一同は同博士に案内されて California Institute of Technology のあたり、Hale 博士の私立太陽觀測所に行つた。G. E. Hale 博士は、一昔し前の1923年末にも此のバサデナ市に滞在中、會ふ機會があつたのかも知れないが、不幸にして面識無しに終つた。こんどは、Adams 臺長の厚意により、特別に恵まれて Anderson 氏の直接紹介により此の老大博士に親しく面接する時が與へられたのは嬉しかつた。

時刻は15時頃、小ぎれいで、エヂプト模様に飾られた白壁の觀測所に入ると、祕書のレデイが現はれ、Anderson 氏と長田氏と自分と三人は直ぐに Hale 所長の大きい書齋兼研究室に案内



長 田 氏 と 筆 者
(ヘール觀測所を背景として)

された。一見、まことに上品な紳士！ 舉動に多少の弱々しさを感じるのは、さすがに老年の故か、或は十年來の病氣が全治しないためか？ しかし、い

かにも愛惜よく、遠來の客をもてなされる態度の親しみには魅せられた。日本の話、エジプトの話、カナダの學術會議、シカゴの會合や博覽會の話など。四人が交はす話題も、のどかで、且、朗らかであつた。そのうちに Hale 氏と Anderson 氏とは Cosmic Ray のことについて込み入つた議論を始め、暫くは客の居るのも忘れて論じ合つたが、間もなく『宇宙線は天文學上の問題であつて、決して物理學上の問題でない』といふ點に二人の意見は一致したらしい。

話が一應すんで、Hale は立ち上るや、『太陽觀測室を御案内しませう』と言ひつゝ歩を進められる。導かれて隣室に入ると、そこには、屋上のドーム内のシロスタトから來る日光を、深い井底の鏡面で反射し、40cm 大の太陽像を作り、其れに“quarter”プリズムを當てて、二人の青年觀測者が、互ひに數値を呼び交しつゝ、黒點の磁力を測定してゐた。次で、地下室に入り、スペクトル研究裝置などを見せられ、それから一同は元の Hale 氏の書齋に歸つて來た。自分は、此の時、或る事の豫期を破られたかの如く感じたので、改めて Hale 氏に

『近年御發明の Spectroheliograph を拜見させて頂けませんか？』と聞いた。すると、Hale 氏は氣の毒そうな顔で

『Spectroheliograph は、作つたものを皆諸所の天文臺へ送つて了ひましたし、一つ此の研究所用のものは只今修理のため工場へやつてありまして、御目にかけられません』

との返事！ 自分は多少の失望を感じたが、Hale 氏は尙ほも言葉をつゞけて、Spectroheliograph といふものは、未だ々々不完全なことで、今でも絶えず新工夫や修理改善が必要であることなどを繰返された。自分は、

『實は私の天文臺でも、Spectroheliograph 係りのウエジマ理學士が、一兩年來、獨特な Spectroheliograph の試作をやつてゐます……』と言ふと、ヘール氏は突然甦つたやうな晴れやかさで、

『それは誠に結構！ 大賛成です!! どうか其れが成功して、新型が どしどし 製作されるやうに、其のドクトルに宜しく御傳へ下さい。』といふ挨拶であつた。

（ 42 ）

ヘール氏の研究所を出た吾等は、アンダソン氏に案内されて、御隣りのカリフォニヤ工科學院へ案内せられ、其所でアンダソン氏から主に、例の口径5米（“200吋”）の大反射鏡の製作工事を見せられた。先づ、モデルを見せられたが、此のモデルは、數年前から新聞や學術雑誌に載せられてゐるフオク型のものと全く違ひ、非常に大膽な籠形の珍型であるのに驚いた。長田氏がしきりに自分の袖を引いて、「此のモデルの寫眞を撮れ」とすすめるのだけれど、原作者（アンダソン氏）が未發表のものを勝手に自分のカメラに納めて、他日之れを記載したりするのは徳義上宜しくないと考へたから、聽かなかつた。「今こうして見てさへ置けば、歸國後、モデルを新作するだけの記憶は失はないつもりだ」と自信もあつたので。

聽くところによれば、大反射鏡は目下 N. Y. 州の Corning 硝子會社で Pyrex ガラスから製造中であり、機械部は此のカ州工科學院の工場でアンダソン氏監督の下に作られつゝある由。既に、觀測者のボックスを兼ねた第二鏡のセルが出来上つてゐるのを見たが、此の一つでさへ直径2米もある大筒であるには、長田氏も自分も一驚した。

長田氏と Anderson 氏とは既に數年來の親友であり、其他の Mt. Wilson 天文臺員——殊に Joy 氏や Adams 氏等とは度々交通して居られる由。アメリカの學者たちが、こうした外國種のアマチュア等をも常々親切に指導せられるのは全く感服のほかは無い!!

（ 43 ）

バサデナで此うした貴重な訪問や見學に可なりの時間を費し、カ州工科學院を出たのは、もはや16時であつたが、それから急に長田氏のアイデアで、El Monte の Lion Farm を見ることとなり、大急ぎの車を東南に走らせた。Farm の門が閉ざされる漸く數分前に入場し、それから心をヒヤヒヤさせながら二百幾十頭の大獅子小獅子の檻を見てまわつた。「ダイナマイト」とか何とか言ふ恐ろしい猛獸に睨まれたり、吠えられたりして、遂には全く戦慄しつゝ、17時半頃に場内を出た。

（ 44 ）

此の夕は一旦宿へ歸り、18時から Saratoga 街の木崎氏邸で晚餐。其の後、21時から日本人聖公會堂に集まつた邦人たちのために 一時間ばかり天文講演をした。歸宿就寝したのは23時であつた。

（ 45 ）

七月21日（金曜）。今朝ロスアンゲレス出發の筈で、早く起き、市街の景色に名残を惜しみつい、長田氏に送られて宿を出で、8時發の S. P. 列車に乗り込んだ。

汽車は特に選んだ海岸線急行の晝間列車で、十年前は此の同じ線を サンノゼからロスアンゲレスまで 夜行したために見られなかつた沿線の景色を眺めやうとするのである。天氣は流石にカリフォニヤの 空に應はしく、それに、山岳部や東部一帶と違つて、眞夏とは言ひながら、氣溫は實に 清涼であるため、獨り旅も大に楽しかつた。

トンネル二つ三つ、線路の多くは山と海との間を行くので、少しも米國らしくなくて、恰も故國の 海岸を走つてゐるやうに感じる。只、窓外に見る牧場や、大小の人家の構へ、山や野を縫ふアスファルトの 自動車道路などが時々異國情調をそゝるのみ。——列車内は例によつて ガラアキ。大きいボギー車に老婆が四五人乗つてゐるに 過ぎないから、甚だ氣が樂で、自分はひそかに靴をぬいだり、居眠りをしたり、物賣りと戯談言つたりした。

19時38分、夕暮れの San José 驛に着。圖らずもメソヂストの一教會員に迎えられ、案内されて St. James といふ小さい ホテルに入つた。來て驚いたことに、此の地では兩三日前から Westminster Church に於いて全米の Presbyterian Church の大會が開かれ、日本人の牧師たちも十數名、同じ此の St. James ホテルに投宿中であつた。

自分は、宿に荷物を置いて、直ちに メソヂスト教會の渡邊牧師の病氣を見舞ひ、22時頃、宿に歸つて見ると、大會に出席の日本人牧師たちが 歸つて居られたので、挨拶をするうち、急に話が 出來て、明22日、自分と相前後して此等の牧師たちもリク天文臺へ 登られることになり、自分が、及ばずながら案内をするといふ約束をした。誠に奇遇奇縁である。

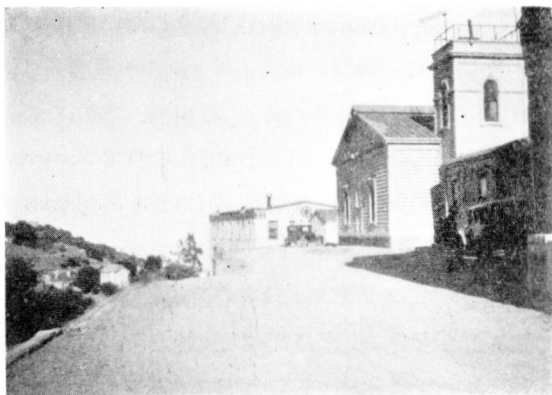
（ 46 ）

七月22日朝9時30分、自分は San José 市内の Westminster Church で開催されてゐる Presbyterian 派大會に招かれ、晴れの壇で、[「]日本からの唯一の使者[」]といふわけで、一場の挨拶をした。それから直ぐ自分は 牧師たちより一足さきに、Bus に乗つて Hamilton 山を登る。十年前の記憶にある山道とは變つて、非常に良くなり、車のスピードも至つて速い。以前には San José から Lick 天文臺まで片道4時間（但し、Smith Creek で食事のため約1時間の停車を含む）を要したものであるが、今度は僅々1時間40分で、早くも11時40分に天文臺の玄関に着き、Aitken 臺長の親しみある顔に迎えられた。

（47）

Lick 天文臺では本館の内外、圖書室のあたりなど、それに Moore 博士にも挨拶した後、Aitken 臺長の宅に招かれて、同氏と二人きりの午餐を頂いた。夫人は御不在。又、臺長も所用のため今日午後は下山されるので、急いでゐられる。

午後、自分は先づ Jeffers 氏と會つた。氏は Tucker 博士の後繼者として此の天文臺の子午線部の主任であり、尚ほ其の餘暇に Mills 反射鏡で微光星の観測をやつてゐる。此の日、氏は自分を子午環室に導いて、先年のエロス観測以來の話をいろいろと聽かせてくれた。



リック天文臺の背庭

Jeffers 氏の室から自分は Moore 氏の室へ行き、Moore 氏から多くのスペクトル寫眞を見せて貰つた。それから、[「]日食のことにつき、是非 Trumpler 氏に御目にかゝりたい[」]と言つたので、Moore 氏は、行方不明の Trumpler

氏を熱心にさがして下さつて、遂に16時頃に見付かつた。それで三人でトラムブラ氏の室で、1922年度の、かの歴史的なアインシュタイン寫眞原板を見せて

貰ひ、いろいろの貴い経験を聞きながら、原板上の星々の像を点検した。

17時、Moore 氏宅の晩餐に招かれ、其の家族の人々と十年前の記憶など語り合つた。食後、時恰も美しい日没なので、皆で屋外へ飛び出して、Green Flash を観やうと力めた。——しかし遂に之は低い雲のために駄目。

（ 48 ）

今日は土曜日で、天文臺公開の日であること、永い昔から 變りが無い。日が暮れる頃から、多くの自動車が山へ登つて來、天文臺の玄関や廊下は無数の天文ファンで大騒ぎとなる。

20時頃、約束の如く、Presbyterian 派の日本人牧師の一行は十二名到着された。先着の自分は之れを迎へ、本館の内部に陳列されてある品物や天體寫眞などを説明する。——こうなつて見ると、自分自身が リク天文臺の一來客であることは忘れて了つて、全くの主人顔である。20時半頃、當番の Trumpler 博士が大赤道儀室に群集を案内して、天體の觀望を許される。今夜の景物はヘルクス座の大星團である。トラムブラ氏は、誰よりも先づ自分に此の宇宙偉觀を見せられ、それから他の人々を着順に見せられた。さすがに大望遠鏡の焦點で見る此の星團は、まざまざと其の團中の星々の配列の深みが實感された。!!

あはたどしい中にも、こうして公的私的のリク天文臺訪問は首尾よく終つたので、22時20分、自分は牧師たちと二臺のバスに分乗し、途中、日本語で天文の話や宇宙の話を交しつゝ、暗の山路を降つた。宿へ着いたのは23時40分であつた。



リク天文臺村

（ 49 ）

七月23日朝10時、サンノゼ驛發の列車で、10時40分 San Francisco 第三街

ステーション着。直ちに昔なじみの小川ホテルに入つた。午後、幸田牧師の來訪をうけ、市の内外、殊に海岸公園あたりをドライブし、水泳場や、水族館等を見た。氣候が非常に涼しくて、とても夏服だけでは居られない。七月の末で、一年中の最も暑い時であるのに、どうしたことかと不思議なくらゐである。一週間前までは東部や山岳部の酷熱で、アリゾナ州を去る夜などは、汽車の中より外氣の方が暑くて、115°Fであつたのに、南加州に入つて俄かに涼氣を覚え、いまこの桑港では 50°F 臺である！

夜は當地メソヂスト教會堂で天文講演をした。可なり多數の聴衆であつたが、中に二三酔漢が變な質問をしたりなんかして、うるさかつた。

（ 50 ）

七月24日（月曜）、此の日、朝のうち A. M. 汽船會社へ行つたり、總領事館へ荷物を貰ひに行つたり、序でに Market Street あたりの盛り場を散歩した。午後、宿を立ち、Pier の驛から Ferry 船で Oakland 市に渡つたが、市街電車を乗り誤つて暫くまどついた後、漸く一日本人に教へられて、S. P. 線の驛に荷物をあづけ、それから Berkeley の加州大學を訪れた。此のあたりは、十年前、英子と二人で來た時に餘り急いでゐたためか、殆んど確かな記憶が残つてゐないので、今日は全く始めての土地のやうに感じたが、とにかく、大學の構内を歩きまはつてゐるうち、北端に近く Student Observatory を見つけ出したので、つかつかと入つて見た。時刻は 15 時頃であつたが、會々 Bower 氏に面會し、可なり長く立ち話しをした後、Laboratory 内に研究中の Shane 氏等に室内を案内され、太陽のスペクトルなど此の天文臺として一寸風變りなものを研究してゐるのを知つた。臺長 Leuschner 博士は夏休で、旅行中であるといふことであつた。

18時、Oakland 驛から Cascade Limited といふ急行列車に乗り北上。

（ 51 ）

七月25日、カリフォニヤからオレゴンの山地を越えた汽車は、15時 55分にポートランドに着いた。海までは可なり離れてゐる土地であるのに、Columbia 河の御蔭で大きい船が幾つも遡つて來てゐる。停車場で後藤師に會へる筈であつたのに、何かの行き違ひから（あとで、之れは同師が急用で不在と知れ

た), 誰にも會へなかつたので、止むなく又同じ列車で16時20分にポートランド發、車中から始めて見る Tacoma 市を眺めつい、又、夕日に輝く Rainier 山を見守りながら進むうち、21時20分に Seattle のユニオン停車場に着、東方氏其他の人々に迎えられて、N. P. ホテルに入つた。

(52)

シアトルは十一年前の秋、英子と共に始めて踏んだ外國の土地であつた。其の時も此の N. P. 旅館に泊つたが、こんど來て見ると、市街の様子は、他の市ほど變つてゐない。

七月26日、午前中は A. M. 會社や銀行へ行き、又、電信會社で日本へ歸朝豫定の電報など打つた。午後は14時から東方氏に誘はれて市の内外 Washington 公園や大學あたりをドライブした。大學の天文臺に、元 Lick にゐた Jacobsen 教授を訪ねたが、不在であつたので、置き手紙した。

(53)

七月21日、この日は朝10時から 市内日本人聖公會で自分を中心とした教役者會があり、いろいろの話題によつて座談した。カ州の伴氏も見えてゐた。正午には住友の村田氏に連れられて市内の日本人有力者たちのクラブ午餐會に招かれ、多くの紳士に始めて御目にかゝり、14時過ぎまで 甚だ愉快的な雑談に花を咲かせた。

此の夜、18時には三井物産の石原氏宅で領事と共に 晚餐を頂き、それから約束によつて20時から Washington 街のメソヂスト教會の Devotional Meeting へ出席、一場の感話をなし、21 時再び石原氏方へ歸つて來て、夜更けるまで學問のこと、社會のことなど語り合つた。

(54)

七月 28日、朝 8時、招かれて糸井氏宅で食事を頂き、それから氏のやつてゐられるホテル事業を參觀、次で四十何階のスミスタへ案内せられ、所謂「フー・ワ・タウン」の説明をきいた。

正午、村田住友支店長の御招きを受け、それから 暫くドライブ、18時30分當地にゐられる同志社出身者の會で歓迎晚餐を饗せられ、20時から 日本人會館で天文講演をした。

（ 55 ）

七月 29 日、いよいよ今日の出帆の日である。朝から室内で荷物などの整理をし、9 時過ぎ、ホテルの車に送られて Pier へ行き、東方氏の案内で President Jackson に乗り込んだ。11 時出帆。

静かな Puget Sound を上り行く景色を楽しみつい、16 時、なじみの Victoria に入港。小倉牧師夫妻に迎へられ、僅かな 時間ではあるが、碇舶中を利用して Japanese Garden へ案内せられ、珍しい物を見た。船は 18 時に Victoria を出帆、Juan de Fuca 海峡を西へ、外海に乗り出す。夕靄に消え行く島々の景色の中に、しばしアメリカとの別れを惜んだ。

（ 56 ）

San Francisco から出る A. M. 線の船は此の頃満員つゞきのため、自分も船室が取れなかつたのであるが、Seattle からの此の船は非常に閑散で、只、東洋向きの貨物だけが多少載せられてあるといふ。従つて、出帆して後も、皆御互ひに淋しがり、一等二等の區別なく、時々は三等客も交へて、デッキで遊んでゐる。

自分は Seattle 出帆の時、新聞や雑誌を可なり澤山持ち込んだので、船中、毎日、急がしく此等のものに読み耽り、又、カバンを開いて、旅行中の書類の整理などした。波は極めておだやかである。

隣室に Labbé 氏といふ老米人が居る。すぐ馴じみとなり、屢々室内や廊下などで話した。此の人の話に、今年初以來、氏の住む Portland(Oregon) の海岸に大小無数のガラス球が、海流に乗つて東洋から漂流するので、大評判だといふ。詳しく何物だとも、果して何所のものだとも分らないが、マークが日本字で入つてゐるといふ。話だけでは サツバリ判じかねるので、とにかく、氏が日本漫遊を終へて 歸國された後、其の一つを見本に自分の許へ送つてくれられる約束をした。（此のガラス球は昨年末に花山へ到着した。そして、天文臺の陳列棚に置いてある。）

（ 57 ）

八月 3 日、船から Aleutian 群島の姿らしいものを見た者がある。其の夜、船は日附變更線を通過したので、次ぎの日は八月 5 日と呼ぶことになり、八

月 4日は船中で全く姿を現はさなかつた！ 波は、やはり、極めて静か。

八月 6日は日曜で、11時から一等 パールで Thomas 宣教師の主裁する禮拜があつた。翌 7 日、横濱着の日を英子に電報す。午後、Jeans の New Background を読む。8 日、いよいよ横濱へ近づいたので、入港通關等に関する手続き用紙が配布された。此の夜、久しぶりに空が晴れて、星が見える。

八月 9 日、早朝鯨や海豚等が見えた。10日は荷作り、其の夕暮れ、船の右舷に船が見え、又、陸が見えた。鹿島沖か？ 犬吠崎らしいものも見え、夜中、四圍は、にぎやかであつた。波は静か、此の全航海は、『まるで Ferry みたいだ』といふ評判。

八月 11 日早暁、船は濃い霧をついて横濱港外に入り、検疫や入港手續の後、8 時、岸壁に着き、英子に出迎へられ、ホテル・ニウグランドに入つた。午後、東京へ行き、平山信博士に歸朝の挨拶を述べ、土居、五藤、佐藤諸氏に御目にかゝつた。

翌 12 日 13 時に横濱發、21 時 40 分京都に歸宅。（終）

た　　よ　　り

山 本 先 生 机 下

拜呈（前略）

去る 16 日上野博物館の 20 櫛で二三の天體を觀ました。デフラクションも試して見ました。17 日の夕には清水眞一氏を訪れ、寫眞裝置苦心の跡を拜見致しました。18 日夕、木邊氏の御庭の 30 櫛反射鏡を拜見、Mounting に関する御説を承りました。歸途、山科のあたり、列車の窓から山の頂きに灯影を認め、大分心が動きましたが、遅いので、宅へと急ぎました。以上は公用旅行の夜間敷刻宛を利用致した譯であります。（中略）私共は何處迄も先生の御役に立ち度いと念願致して居ます。

奥様よろしく御傳聲下さいませ　敬具

昭和九年五月十九日

神 戸 荏 部 生